

AVOC の「輪」

県職員 OB / 青い森ボランティアズクラブ会員
鶴賀 茂世



早いもので19年度も終了ですね。振り返ってみますと、たくさんの良い企画があるのに参加できなかったことが多く残念な気持ちです。

私の提案は殆んど実現して下さり嬉しく思います。7月18日の「AVOC ビア交流パーティー」、10月6日の「あすなる荘でスポカル体験、川柳吟行」、11月21日「認知症介護セミナー」には多くの方が参加して下さい、楽しい交流のひと時が持てました。又、メンバーのふれあい作業所國米所長を訪ね、野菜をいただいたり、事務局から戦傷病者福祉事業への講師依頼をいただくなど AVOC のネットで有意義な1年でした。

来年も一人ひとりが、ひとは誘う呼びかけをして、AVOC の輪（和）を広げましょう。

ライフデザイン支援事業をふりかえって

県職員 OB / 青い森ボランティアズクラブ会員
神山 節郎



ライフデザイン支援事業の企画・運営会議は4回に及ぶもので、事業計画の立案から運営について十分に話し合わせ、今日まで多趣多様な（アイデア満載）セミナーが実践されてきました。

私は企画・運営委員で居ながら、ゼミへの参加は数えるほどで推進委員やエーボックの事務局には申し訳なく思っています。

今年度のゼミに参加した活動人員は9月の段階で昨年度を上回っていたので9月以降のゼミ予定から割り出すと最終的には18年度の活動人員（342人）を大幅に超えるのではないかと考えています。

天候の都合とか、他機関のイベントと重なったために見合わせたゼミもありましたが、人生を自らの手でデザインし、充実した生活の実現を目指すことを目的に計画された支援事業はいずれも立派なものです。

それだけに県職員の家族および OB や家族に連絡する方法が確立されれば、もっと、もっと活動人員が増え、喜ばれると思います。

川柳 「ボランティア」

県職員 OB / 青い森ボランティアズクラブ会員
尾形 盛二



ボランティア 心の貯金しています

佐藤 とも子

渴いた街へ 愛の滴を ボランティア

田野上 ひかる

家の中 ほったらかして ボランティア

西村 心一

根の生えた 椅子を動かす ボランティア

三浦 敬光

スーパイトの動尊付けてボランティア

尾形 せいじ

ふれあい作業所野菜応援隊

県職員 OB / 青い森ボランティアズクラブ会員
千葉 悦子



19年度の初回委員会の席上で身障者施設ふれあい作業所所長さんが畑のボランティアを探していることを知り、5月から作業を開始しました。また、全てを一人ではできないため神山さん、尾形さんをはじめボランティアの方々に協力していただき、野菜応援隊と呼ばれていたようです。条件は、保育園の園児にも見せるため花が咲き実のなる野菜。多くの園児が実っている野菜を見ることがないようで、大きく実ったズッキーニにはビックリしたようで、所長さんから、「園児たちが喜んで、ズッキーニを持って写真を撮りました。」と連絡がありました。

8月に行われた、通所者と野菜応援隊とのバーベキューでは、畑から収穫したトウモロコシ・スイカや野菜も食べてもらうことが出来ました。何回か作業所で通所者の方々と昼食を一緒にしましたが、バーベキュー会時の生き生きした笑顔が心に残りました。

介護老人保健施設内での工作クラブ講師を経験して

県職員 OB / 青い森ボランティアズクラブ会員
長内 利雄



私の場合は、殆ど八十歳以上の高齢者で障害者である方々がお相手でした。高齢者イコール障害者といえる方々です。手足が不自由だったり、思考力が衰えたりしている方々ですが、明日の生活が今日よりも楽しく充実することを願っています。「絵を描き物も作りたいが手が動かない、長い人生経験をおしゃべりしたいが口がマヒしていて少ししか言えない、どこかに行きたいが車椅子のために思うように動けない」等の方々の思いを少しでも叶えてやれないかと思えます。手が動かなくても描ける絵はないか、お喋りできなくても言える方法はないか、あまり経費が掛らない方法を見つけたい、それをすることで施設に負担を掛けるようなことはしたくない、そんなことを考えて一年経ちました。でも、来月又来てくださいと彼等からお世辞を言われると喜んでしまいます。「私も年取ってられない」と奮発してしまうのです。結局、私のためになっているようです。

ライフ支援事業をふりかえって

作って遊ぼう！昔の遊び「羽子板作りに挑戦」
県教育庁 / 青い森ボランティアズクラブ会員
三浦 一範



この事業に参加させていただいて2年になりました。自分自身気をつけてきたことは、やるうとしていくことが目的に沿っているかどうか時々振り返るということです。

参加対象の中心が、県の職員、OB であること、参加した人たちが、よりよい人生をデザインするヒントになることの2点です。

今年は、羽子板を手作りして羽根つきをしました。参加した人たちが、楽しかったなあと喜んでくれたので、家族との楽しい一日をデザインして1つOK。

さらに、お父さんお母さんたちには、体験したことを元に、地域の人たちに昔の遊びを伝えるボランティアのネタとして身につけてくれたら、ボランティアを通した潤いのある人生をもう1つデザインできた、ということになるのではないのでしょうか。

ちなみに、昨年のアジアのカレーの講師をしていただいた留学生の方々も、自分の国のカレーを青森の人たちに伝える経験をしたことで、その後、積極的に楽しく日本人たちと関わることができるようになったとメールで伝えてくれました。

このライフデザイン事業は、参加者だけでなく、講師の方々も豊かで潤いのある人生をデザインしているんですね。